

星 蝕 詠 嘆 集

Eclipse Arioso

中田満帆

a missing person's press

2019

装丁——著者自装

片足は墓穴にありてわれは立つ——BWV156

星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso 中田満帆歌集

星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso

春
＊
7

夏
＊
42

秋
＊
78

冬
＊
III

跋
＊
I57

寺
山
修
司
へ
捧
ぐ

春

野兎のように兎ら去るしぐれより隠しに寂し手はみずからの

午睡ひるねするぼくの意識に落ちてきて風にふるえる野苺の果は

春畠にたつたひとりのほほえみを浮かべておれを誘うマネキン

拒まれているでもなしに鴉見てわれもひとりというほかはなし

夜間飛行いちまひきりの板ガムでわれは飛ばさん空しさなどを

失童のあとさきサヤという女ともにぼくは笑った羞ぢらいながら

バナナ積む港湾業務・海はまだ春に馴染んでいないよう

ひとをみな滅ぼす夢も愛ゆえにからたちの木へ身をば委ねる

急行の人生をみな生きながらブレーキパッドを知らないでいる

裏階段展びてゆけゆけ入れ目なる緑の犬のまなこのなかに

あれがただ青麦みたいに見えるからふりかざされるまえに答える

さまざまの過古のはざまに存するという出生拒む黒いみどりご

眠らない木々のようにはいられないダンス、ダンス、ラジオに合わせ

なにか叫ぶような声がして一匹の蟻を浮かべた人形の町

喪えるものみなとるにたりはせぬ・はくさいの虫など殺すひととき

愛などにあこがれたまま頓死するのがせいぜいだろうと青葱を切る

きみにとりなにを意味するものがあるう情けのつゆもないまなざしで

展示さるる奉教人の木乃伊よりいまとりださん不信心など

やまびこの不在零狼かけぬけて登山家一同みな喉喰わるる

銀河にてさまよう塵を日の本と呼びみかどらの車スピードをあぐる

かくれんぼする狂人や愛も笑いもない夜の出来事

郷愁に隷属しまい、与えまい、からすの群に石を投じる

フロントグラスに突然やって来たかの女の生き霊にキスを

人狼の夜話を聴きつつ眠りたる架空の息子の羅針盤かな

姉妹みな葬りたくて断崖の彼方の星を撃ち落とす夢

家族欲す憐れなるわが魂しいの救われざるを月に見ており

亡命の猫いっぴきに餌をやり詩行ふたたびわれに息づく

戯れに魚の頭落としたる猫の営む理髪店にて

光降る貧窮院の壁に凭れ酒という死を呑みつづけるかな

水たまり飛び越しながら光りつつ最後のひとつに加えられたし

ソーダ水の残りの滴ばちちとしてコップのなかの犀眼を醒ます

叢の昏れるトーチカ銃痕の数ほどあらんや若き友の死

灰かぶり姫の幸せを語りつつ蠟引きのタンブラーに安酒の父

それがぜんぶだったんでしょうか、からっぽの郵便受けに水

小さな花きいろい花が咲きましたら惜しみなく千切れ惜しみなく奪え

もうじき晴れるという報せ来て河床に素足を入れる、ほらこれがきみの羊水か

春を過ぐるいっぴきの猫歩くとき死の爛爛を啜えるべきかな

花狂いするものはみな射たれよといっぱいの水に潜るひとあり

時来れば耳鼻科通院終え遂におれも成人、死者のレースを

わからない、っていう顔して、もどりみちもはや見えない春霞濃く

濡れそぼつ聖母のごとき裸婦像やわれを見初めて連れてゆかんか

少なからず友と呼びたきひと存るもそうは呼べない物理的距離

パツチェンの詩集をひらく午後の陽に啓示されるものあらずや

待ちながらみずからをまた省みてバスは来たらずさつき光れり

夜ふけて灯りをすべて落とすたび足許にいる過古の生き霊

ひとの世の角を曲がれば深甚と迎え入るるはかの女の幻影

かげろうの歌ひとり聴くひねもすにたれかを欲すこともなきまま

ひとびとは過ぎず時間のみ過ぎ、ぼくはふたたび眼をそらすかな

時というときはざまで揺れているモーターの灯よぼくにたなびけ

垂直の人間足り得、わずかなる信を授けらるる僥倖を待つ

あたらしき浮き世に生きてひとびとのうつろをひとり遊び生きたり

喰われたる虹鱒ひとつ漁火を両の眼に焼きつけたりぬ

父の死后よ柩のなかに入れられて花という花も狂熱せん

牡蠣の身にすがりつくような愛をもってわれわれは檸檬の化身となりぬ

虚構にて森番たりしわが手斧みずからをまたうつし世へ還さん

二十四時くろねこひとり訪れてけむりをみせて語る夜ある

光る襞、少女のいくた過ぎ越してかげのうちへと帰る草や木

うつしよの通りを歩む群れむれにだれも知らないおれを追う鬼

水のないプールのごとくからっぽの水槽抱いて少年泣きぬ

乾く蓮葬場の果てに生えておりわれ昏々としてそを見つむる

呼ぶものの声にむく顔またひとつたがいちがいを求めて歩む

陽ざかりにシロツメ草を摘めただ少女のような偽りを為す

ぬかるみに棲むごと手足汚してはきみの背中を眼で追うばかり

いくばくを生きんかひとり抗いて風の壁蹴るかもめの質問

うごくもの、うごかないものにはさまれてきょうも飛べないみどりの男

いちまいきりの黄葉^{もみぢ}の終わり見落として春を喪う少年の頃

草の葉のなまえを調べ図書館の暗がりはいまぼくのものなり

きみどりいろの天使のひとつ買いに来て墮天使とつた婦人に注目！

墓石の昏さを抱えねむるひと——ひとの姿を借りた墓石

流し雛が澱みのなかでほほえんでいるなにかが芽吹きはじめたからか

かりものの、かげのひとつをたずさえて踊りつづける広場の彫像

さまよいのものから見あげる窓はみなひとでないものにこそふさわしい燈しがある

きのうがまたきょうのふりをして歩いて来る・なんだよおまえ地平線に帰れ

子供らがまた争いの支度をしてる、ねえお母さん朝ご飯まだ？

木箱くずす夕べの痛みありわれは生贄ひとり求むるばかり

花野にてふさわしい死を死にたいといい散水機が暴走したり

天使来る滅びのときの滴りに翅で描いた未知のよろこび

手相見の皺の多さよ希望線反抗線の尽きるところまで深く

石を探す石を探す石を探すさりとして埒もない河原の真午

剃刀の光りのなかの黒猫の仕草が昏いところに芽吹く

常しえにきみのおもざし揺れるときふとあたらしい犯意を見いだす

別れにも涙流れず悲しさをひとり尿して路上に託す

蝶死せるいっぽん道の彼方にてだれが殺したとつぶやく安寧

でもそれがまちがいだなんていわない午前一時の脱走劇

肥桶をおきざりにして来る町に馬がひりだすような、さむけ

まだ知らない、濡れた唇、雨模様、下の句のない男の俳句

静かなる時代よいまだ死の灰を喰わずして存することはできず

川上にひとがた流し少女期を葬り去るは村を出るとき

みどりさえ危うくみえる五月病咳きのなかにすべて失う

そばにいたことなんかできもしないのにただもういちどだけ花に触れる

光りさすなか一輪を剪りに来て茎もてあます朝餉のあとは

鴉飛ぶ姿は孤独をおもわすと呟いておりわが妹は

ほころびにまみれた産着落ちてるとかわいいひとがまたも過ぎ去る

進入禁止の路次また路次よ葬式に遅れてひとりギンズバード暗唱す

きみがいた給水塔の真下には壁面塗装用の足場ばかり

雨がいま暗渠を走る・もういいよ・きみが話してくれていたから

なぜだろう・どうしてだろう・仮面売る男はいまも素顔のまんま

草のような花のようなまぶたのうえになぶくものに手をふる

修司忌やさつきのみどり燃ゆるまで灰になるまで書物を捲る

葡萄を量る女たちには戒めのような両の眼泳ぎつづける

花曇る停留所よまちがえてひとつ手まえで降りる少年

夕なぎに身を解きつつむなしさを蹴りあげ語る永久のこと

夏

唇^{くち}ちを噤^くむ——きみのためにできるのはそれだけと識^しるこの夏祭

桶の水零れてかれは帰らない水面に熟れる桃も昏れゆく

ともすれば腿も危ういスカートの妹の肩に飛蝗あをあを

列車には男の匂い充ちたれて雨季も来たれり新神戸の町

ここにいて心地よければ祝福となすがよろしいと夏の祖父母は

晩夏訪れてたつたいま淹れる珈琲の湯気に消ゆる死者のすべては

ぬばたまの夜をレールが展^のびゆきてしずかに充たすわが青年期

小雨降る道路改修工事にて少女誘拐われは聞くのみ

青林檎焼きながらふとおもえり遠き姉妹の婚姻なぞを

たくさんの傘の行進見おろせば濡れるまま立つ歩道橋にて

「くちびるの厚ければ情も篤し」老ゲイ・ボーイのまなざしやさし

降られつつレインコートを展ひろげれば羽根に見立てて落ちてゆくわれ

だからなんだ、桃のような月のかげに口腔の血がうずくなんて

黙ったまま他者にまみれて検品のアボガドの色どれもすすしい

みながみな幸福だった験しなくきょうまた猪色の列車にゆらる

だんだんとスピードを増し9階の階段裏で消える潮騒

ソーダ水の壺の雫に過ぎゆきし少年の日の汗をおもいぬ

暗殺の夜々ひとり待っているおまえが来るといふ手なぐさみなど

どうかまたあのうそを吐いてくださいと告げるきみに取り憑かれ

たとえば草のように花のようにゆれてみたい傘ならきみが持てばいいから

時が鐘を鳴らす教会の尖塔に鳥がとまり雲はるか港を流れる

ひざかりに点々とする血のしずくだれにも繋がれないということ

花かすみ病かすみのなかでいま身をひらかれるひまわりの種

もう起きあがることもできません・えいえんを着た馬が視ている

水中めがねなくしちゃったよぼくはもう男の子にはなれないかもね

星にさえ追いつかれて観望の子供のひとりおれを笑った

かれのみの秘密を欲しほる穴に埋めるものなし森は明けゆく

なにもものも欲せず夏を一過する貨物列車に身を委ねたき

あじさいがゆれるゆれるまたゆれてやさしさなどをあざけりゆれる

海という一語のために汲まれてはあわれしづかなる7月の桶

朝どきにれもんの一果撫づゆびのあいだ零るる無名の息づき

つぐなえることもなきまま生ることを恥ぢ草色の列へ赴く

神に似し虹鱒捌くはらわたに出産以前のかがやきばかり

うちなる野を駈けて帰らん夏の陽に照らさるるただ恋しいものら

素裸のれいなおもいし少年のわれは両手に布ひるがえし

水鉄砲撃ちつくしたり裏庭を駈けて帰らぬ幼年の業

ドラムセットくずれつつあり客席の少女のひとり高くジャンプす

翻るワンピースや物干しの彼方に失せる数千のきみ

ひとのなき青森県の三沢にてふと雨さえも言語足り得んや

ほどかれた靴紐みたく細長の柩のなかに収める両の手

ひとがみなかけを残して去ってゆく気づけばいま人工降雨実験なり

叢^{むらさめ}雨の降るはせつなよ燃えあぐる模型飛行機路上に融けん

踏む水のおもに浮かべる月だれか愛しいものをぼくにわけなさい

残されてまだここにいるという意味を笑うみたいに雨は過ぎ去る

告げるには遅いおもいのなかで拭うもの・たとえば薄い胸板の汗

成長を遠ざけながら歩く牛挫折したいと駄々をこねてる

雨降れるひと日は室へやの暗がりにならすのコップのみが美し

けものすらやさしい夜よみずからを苛みながらも果実は青い

まだ解けぬ方程式も夕暮れてきみのなまえのなかに眠れる

曇天に滲む光りの粒遙か浸透しているきみのまなこに

かりそめの顔なやバナナ・ケース積むわれはだれやとおもういちじつ

つぐないは5月のみどりたずさえて夜の戸口へおいていくこと

舞子というかの女のことをおもいつつ舞子浜にて傘を展げる

たそがれの国の海にておもふこと——なみだという辞、どう表記する？

こんばんは好きな選手はだれですか夜の林を過ぎるあなたよ

指切りのつもりもあらずちぎりという一語のなかに解かれる夕べ

ひとがまたぼくに質問するなぜか答えたくないポールの表紙絵

日本語の律いっせいに狂いたる夏の匂いの向日葵畑

らしさなどなくてただひとりの男として草地のぎりぎりに立つ

春ちかきわが棟をわが梁を夢の空き地に建てる夢見る

くずれつつ街区取り残され海のふたたび満ちるを聴く真午

さかあがる星月淋しむくいとは幼きうちに死を悟ること

漁火をたったひとりの友と云い海路の果ての幸福求む

彎曲する水・沈黙する水・したたかにひとを攫って閉じ込める水

廚にて桃が腐れてゆく真午べとついた手で故事を筆写する

どうやってきみが帰って来るのかを古語辞典のなかに見つける

おまえらの声など聴かない容赦なく毀してやろう濡れ縁側を

呼び声がする・遠い森のむこうから、なずきのなかをくすぐるだれか

子供抱きながら傘を差す一瞬のひらめきに口をあける子よ

駈けてゆく足あざやかに光り充ち水あかり発つびしよ濡れアリスちゃん

みずたまりのむこうからうつむいて歩いて来るはさなえの亡霊

夏の匂いするがらす戸のむこうへ歩く歩く水のかたまり

けふれるような胸持つ男青春というものをあらかじめ失っていて

精通のちなる恋よはぢらいは晩生おくてという駅に連れ去るる

なにもかも交換できてしまうからせめてあなたをうたぐっていたい

波打ってくずれるひとよ鶏肉のような色して死んでしまえよ

かのひとの素膚のうえの棘みたく存りたいと願うも夢は終わり

しめさばのすっぱい真夏くりかえす正午に於けるぼくの対処は

ひとしれず放下の果てを死ぬべきと黄色くなったセロリの葉っぱ

麦畑のうちなる誘い墓場にて見知らぬ友のふたつの乳房

恋いというもののいかがわしさばかりはるか弥生の光りに滅びつつあって

どういふこともなかれど声を断つ回転木馬の馬たちはいま

天下原のきぬずれひとつまたひとつ水となり顔を打つ未明まで

鳴らの問いを静かに聴きながら波の答えに飛び込む隣人

ひとつでもいいからと云ってすがりつく火ぶくれた指の愛もある

やめてくれ——ぼくを慰めようとしてゆうこ求める脳なすけの襞よ

黒死病患者のごとく嘴をかぜにさからいあげるからすは

たがために花を剪らんか一輪を求めさ迷い荒れ野に消ゆる

ずぶぬれてゆこうか犬の心臓のような港湾都市を求めて

水吃る排水の管ねじれ死に聞える地下のうたごえなんか

かならずやむかえにいくと告げしままいくども暮れる犬の地平は

夜の鱈捌かれながらいまいちど漁り火に乾いたまなこ見ひらく

いたずらにさみしいともいえず熟れる芽のなかにそつと手をやる

HAPPY END!!! 叫びつつあり海辺にてもっとも黒い波を求める

繫留船よりコンテナ降ろされるぼくのうちがわを嘗めるように

暗がりにもういちど入りたくおもうのは銀塩写真のせいか

ときとてときのなかのたくらみにあらがえないのがかわいい

愛すらも懐かしむのみ／つかのまの人生という盤面の疵

それでなおかの女はぼくを赦さない花の一輪剪って葬る

忘れられたひとびとともにゆっくり同化する銅貨みたいな鈍い輝き

懐おもいだせずにいるなぜ懐いだそいうとするのかもわからない犬

前科者ロックンローラー人夫だし検品係あしたの愁い

申樂のかたちを借りてきみの語る大きな夏の崩落のとき

夜を流れる雲の赴くところまでまわりつづけて観覧車現る

耳を閉じる――ぼくのためにできるのはこれだけとおもう舟あかり

秋

すべては見せかけだろうか崩落する宵待草反転する花と美人画

きみへの道すがら死んでしまったものたちを弔いたいけど茶器がない

おれが死に銀河の西へゆくと聞き腹を立ててる母のまぼろし

月の夜のゴンドラゆれるまだわずか魂しいらしいものを見つけた

うつし世にもはやこがれるひともなく黒帽子の埃を払う

寂しさは茎のふくらみ触るもの近づくものみなどこか拒みて

感傷にふけるわけでもないけれどわたしは過古をアカシアと呼ぶ

たなそこにわれはまさぐる莖たれか泣かしてみたくなればふくらむ

たわむれに古帽を叩きつけてはかりそめの野性を謳う男歌かな

だれもない待合室で草臥れて猶ひと恋し鰥夫の失意

わが知らぬ土地にてゆかこ老いたれる夜汽車みたいなひとの生かな

秋風やひとより遅く学ぶゆえわれひとりのみ労役となりぬ

少しでも幸せであればいいのだと水切りをするぼくらの時間

外套のボタン喪う日も暮れるいつたいぼくがなにをしたんだ

砂糖菓子降る町ありや陸橋を過ぐるときふと考えており

干割れたる道の果てにて蟻歩く北半球の地図を抱えて

生田川上流に秋を読みた
だ雨を聴く水に宿れる永久ということ

まだ生きる蚊の一匹がわれを追いふと恥ずかしい秋そのものが

なにをしているのかぼくの隠しより少し分けようきみに孤立を

ひとひらの地図もつ彼女らの明日をぼくはやぶいて通り過ぎるよ

閉じられてゆくつかのまの改札をぬける魂しいあれはだれかな

喪失の都市に奪われゆきひとりルンペンとなるはたちのわれ

吹かれつつ地下のくらがりさ迷って拳闘士のような男われ視る

発車音警笛排気まぎれつつ見るべきものを見ているひとり

よそものの視界のなかをゆき交えば角まがるたびちがつている顔

真夜中はどろぼうたちの靴おとにこころ癒して路上へ眠れ

ひとがたのように少女をさらいゆく群れの一味に声でぬわれは

善良なライオンなれば翹生やし善良な詩人なれば腐れてゆくのみ

回転式基督像の内部にてわずかに生きる蛆のきらめき

はぐれながら歩むということ一輪の花の高さを飛び越える度

長き夢もらせんの果てに終わりたる階段ひとつ遅れあがれば

かのひとのうちなる野火に焼かれたき手紙のあまた夜へ棄て来て

3 階の窓より小雨眺めつつ世界にひとり尿^{しと}まりており

妹らの責めるまなじり背けつつわれは示さん花の不在を

ぼくという一人称をきらうゆえ伐られた枇杷とともに焼かれん

ひとひとり殺して帰えるひともなくふかき斜面に家は明るむ

ことばもてわかつものなき家なぞも急坂のうえきようも明るく

古電球踏みつけて妬心去るのを待つもういいだらうさらばさらばだ

かみそりの匂いにひとり紛れんと午後訪れぬ床屋の光り

くやしさを飼い殺すなり灯火のもっとも昏いところみあぐる

やまぶきの光りのなかをしとやかなけもののようなきみの黒髪

睦むとききみが乳房や黒髪に寝息を発てるばくという他者^{（ひと）}

蟹歩く月面見んと背伸びして季節外れの風鈴をわる

ひるがえる暗闇坂のももんがよ霧のなかにて変化されたし

拾われて手帖の頁繰ればただかすみかすかなインキで——「絶つ」

手をまるめ照準鏡に見たてては視えないままのかわらけを撃つ

過古という国よたそがれ密航し少年のまま老いは来たりぬ

もはやかつてのことなどどうだっていい西半球へと歩きつづける

やがて産まるるわが児のために古き老木いっぽんを盗む

遠きわが古びた家よトーチカのごとくに滅びつつある夕べ

わが妻となりしのちにて立ちあがるきみのうちなる屠場の灯りは

また帰途を見失えりただひとりゆくなら黄葉の化身とともにして

すつぱりときれいな地獄ひとり抜け開け放ちたい天国の、古便所

それは深いまなざしをしてぼくを見ているいっぴきの猫のようなひとのようなの

ゆうぐれは烈しいまなこ・おもぎしをゆさぶるだれもないぶんこ

見失われた子供のかげに匂いたつ蝶のかばねの青い悔しさ

みどりいろ義眼の犬の眠るうちのびていくのか裏階段よ

ほどかれるサーカステント夜のうち飛びたつために裾をひらめく

立っていることのほかにはやり場なく赤い雀のくちばしを待つ

鳥籠にセルロイドの鳥を飼うかつてのぼくを取りもどすため

煙突のけむりのうえを遊んでる月いっぴきの青い晩秋

波果つるつかのま風のなかに存り灯台守の飛べる音聴く

きみのない夜ふけの廚麴麴を焼く竈のなかの熾きはまぼろし

日本語の孤愁へひとり残されて犀星の詩を口遊むのみ

唾するわがふるさとの地平にて溶接棒の光りは眩し

たかみより種子蒔くひとよ地平にてあわれみなきものすべて滅びよ

あらぶれるもののふりして聴くジャズはからかわれてる、冷めた扉に

空腹の長い午后にて牛脂嘗めきずぐちのない傷みを癒す

蹴りあげて砕けちらばる空壕のうえを浮かべる月のあまたは

ひとの世を去ることついでにできずただ口遊くちずさめるのはただの麦畑

おお夕餉小皿すれあう音もなくわれはひとりの夜に暮れゆく

すれちがうことのすきまをとほりぬけまひるをわかつ郵便人夫

冬用のジャケットは持たないから恥ずかしく秋にとどまるつもり

砂の目をしながら歩むさまよいにわれまた砂のようにまぎれて

空いちまい空腹ゆえに切り落としテレビ画面の孤児ら喰う

たが母も血より淋しきもの通いかつてからすのからかいに泣く

黙するは一語の和解なきままに朽ちて腐るるわが家の窓だ

心臓のような柘榴の実を嚙り幼きときのみずからを抱く

語られることもなかりき物語の標本となるぼくの余生は

枯れし河測量人の蹠音を石が呑みまた朝靄が呑む

未明にてわたしのなかを通過する貨物のなかのかれの愚かさ

冬瓜のあばらに雨の垂れるままわたしなるものわずかに忘る

星月夜きみの夢へと訪れていつまでもただ手をふってたい

眼帯のむこうにかれの未完ありまた未成熟ありまた秋風もある

両の手をひろげてひとり擬態する秋に染まるる地平線あり

ちいさな町のなかでカメラを構えてはあたらしいものすべて妬む

午後の陽のなかで妬心はふくれたるたとえばかつてのゆうじんの家

男たちと歩くかの女に焦がれては両切り菫ひとり啜える

砕かれて猶土に還れず散らばるる浴室タイルの水色を視る

赤インデンの罐づめひとつ転がして休日の陽の明きを憾む

夜が降る9月は遊ぶひとりのみ遊具を跨ぐとうめいな秋

殺意さえおもいでならん河下の鉄砲岩に拳を当てる

フェンスにて眠るものありカメラ持つわれに気づいて走る野禽は

犬の死に捧げる花もないままに過ぎ去るばかり雨の初秋は

愛を知らずわれはひそかに奪いゆく手のひらのなかの秋草をまた

ふたたびという辞のひびきもはやなく檻のなかにて坐るゆうぐれ

空腹と孤立の抱く茨しかぼくにはないという現象学

旅に病める芭蕉のあまた秋霖はかつてのわれを連れ去り給う

駈けていく女の子たちかな秋の日の選挙ポスターいちまいやぶる

冬

ひとの名を忘るしもつき机上にてミニカーいちだい消息を絶つ

安物のファルファツレを茹でながら架空の対話をひとりめぐらす

トマト罐放ちつつあり琺瑯の鍋につぶやくかつての片恋

分光器かざして見つむきみがいた町のむこうの山の頂き

青む眼の一羽が鳴らす鉄の檻ぼくは外套着て匿うさ

そらというものの対義語探したる少女のせつなぼっかり暮れる

しんしんしん　町を踏みしめながら肺透きとおるまで走る暁

冬ざくらわずかに咲くは生田川並木のなかにひとり見つける

時も風ぐ夜更けの海を眺めやる一人称を棄て去りながら

地上にて生きるせつなをひとり食み黒葡萄の眠りうたあり

ひと知れず生きたいなどとおもいたる広告塔の焼け落ちるなか

なまえすら棄てられるなら三畳の女郎部屋にてかすみを見たい

素裸のままに厩の主となる仔牛の胸に暖を取りつつ

灯しては病後のわれを蔑すのみ夜間巡回の看護婦の脚

告白の虚構性にて成るものを買いためて自己という旅

そしてみな自由あれよと願いてもまだ腥きわれの水槽

古帽のなかにて眠る猫いまだ勝ち得ぬことを慰みしかな

冬衣——ひらめく彼方法悦を悟るふりして眠るひとかげ

ひめるものはやなきゆえ葭火のいちばん昏い色を散らせよ

われを憎む妹たちの夕月を洗面器にて保存し眺む

姉たちの行方も知らず図書館で由一の鮭眺める時間

犬を抱くようななぐさみ多かつたりゆうこのいない町が暮れてる

さまよいという光りのなかに立ちながらかつてのすべてを祝福したい

葡萄の木枯れながら蔦壁を這いわれのかげにて実る黒さよ

師走にてひとりの友を葬れし夢を見るわが旅枕かな

冬の根を掘るわれいまだ男という容れものにただ弄ばるる

愛語なく昏くなりたる室もはや孤独に甘えられずおり

朝の田に一羽のからす落ちておりひとりの友のごと葬れり

路上にてひろがる夜に眠たげなおもづらをする雨の犬ども

夜空見てつかのま死する流星よ愛しきものこそ憎むべきもの

病身を椅子に熟めつつ語らええそらごとのみ冬のわが祖父

斑鳩いかるがのそらよひとひら羽が落ち町全体を包む漆黒

倦めばただ天井見つめひとときの虚ろのなかをさ迷いしかな

暗澹とするは側溝流れたる水の弾けん音を聴くとき

うなだるるわが天金の書啓くたび架空の訓示受け入れ給う

霜月の凍てつく蛙喰らうたび遠き仏国の匂い味わう

球体の向こうを永久の夜が来てみなは文字盤砥ぎで終わらず

死との間を洗う行為が人生と云い回廊去る清掃夫たち

（寂滅は叶わぬものよ）老医師の昏き鏡に浮かぶ待合

たずねびと色失ひつつ貼られては消えて久しいきみあり

われら零れ落ちながらゆうぐれの町町に立ちあぐる垂直体なり

保安所の不在は窓にあらわれてやすらぐだろう警報ランプ

尿してレモンスカツシユ呑みにゆくいたぶる相手さがす娘ら

村あかりあかりは遠くとおくにて野良の眸は裸のあかり

追うのみにきみは生きてる道はぐれ不在に灯もる車内ランプも

おまえをなぎ倒せばどれだけ救われるだろう砂場を充たせ悲しい歯痛

戻らないかれらのために開かれて廊のおわりに立つ非常口

ふたたび——はないだろうはなれていくみずからを壁のざらめきに打ちつけても

ためらいを憶えるようにふかふかと湯に沈めゆき青い両の手

時計屋の凍てつくままの針落ちて失われるもの哀音そのほか

友情を知らぬひとりの顔さえもとつぷり暮れる洗面器かな

成熟も病いのひとつ青年の茎はかならず癒やすべからず

肉体が腐敗を免れようとあらがうときに初めて愛というものがある

愚者たるに楽園あらず運河にて孤舟の櫂をゆらす星曆

鳥語のみ教授し給う人類学者人語の解読いまだならんか

冬の蟻よじ登りたりもの干しの子供の靴にむくろとなりぬ

抽撰器しわすの町に運ばれて運命以前の籤の悪名

銀匂うくわるとつと手に歩く松本隆の生き霊を見し

うしろ髪なびくかの女のまぼろしを花色として素描せしかな

わがうちの小さな町の葎屋に灯り点れる永久の夕景

はらいそを識らずに落ちる御身あり視あぐるのみの劇の中絶

うすわらうひとらの若きかげなるを唾棄してなんぞ復讐足りえず

あまねくを荒れ野に譬え歩みゆくもはやかのひとを呼ぶ声もなし

15歳——コンビニエンス更けゆかん性よ艶本買いに歩きさまよう

ねこやなぎ2月のぼくのまぼろしにきみの再誕として芽吹く

校庭の白樫の木老いたれてもはやだれもぼくを呼ばない

名を持たぬコンクリートの塊が悲しむような岸壁の時化

雪降れる養老院よなまえすら忘るる犬はくらがりに集う

ナタナエル喪うときは木枠の窓の軋みがやまないでいた

老犬の檻ばかりなる家々の女主人らだれも顔なく

屠られるけものの匂い週末のステーキハウスの光りまぶしく

浴槽に水のない日よ遠ざかる母の亡霊しばらくおもう

夜の寡婦かぜにまぎれてぬばたまのもっとも昏いところで咳く

冬の菜をきみに贈りたし経験と呼べるものなきわが愛のため

屠られる牛こそ詩情喰うことと殺すこととは一体として

終わりゆく枷や軛を愛おしむ幾千人の正しきひとびと

冬の日に蜆を買ってひとりのみ時計じかけの月を見上ぐる

正午過ぎ郵便配達人来たり詩人きどりの絵葉書得たり

ソーダ水呑みつつ職を熟^うしては水平線を見たくなりたり

雨の降ればそぞろに歩き鼻を突くペンキの匂い黴の臭みは

霧笛鳴る神戸の港不眠症長距離走者ひとり過ぎ去る

午睡せし息子の顔をしらじらと照らす冬日や間伐の音

冬の蠅いきつくところなきままに土のうえに閉じる生涯

I wanna be with

繰り返して猶答えでず海のむこうへ飛ぶかの女たち

鳥を喰う猫ありそんなことなんかいつか忘れてしまいたりけり

菟火をふかす月夜に神という神に下れる人流の罰

法医学教授するひと人体のなかに眠れる口唇期かな

土塊に過ぎぬわれらと唱えたる基督信徒の外套の艶

リングイネ茹でる午后の陽かたむいて生田川へとぶつかるあいま

なみだという一語の対義求めつつひざかりに子供靴ひとつあつて

両の手をうずめて冬の果てを識るもてないおとこたちのうた

流民との交信中なりゆびさきを幾千まえの座標に合わせ

スローガン充ちたる町よ最愛のひとを殺せといつ叫ぶのか

主人公不在のままに幕を閉ず栄光という二字の引力

別離への餞たればいちまいの債務証書をきみに送らん

裁かるるわれの一生市場にて売れ損ないの烙印を待つ

砂漠とは渴く魂しい砂色の女がひとり佇んでゐる

椿とは女の化身惑星を滅ぼしながら旅をつづける

ツヅレオリ陽に曝されてひるがえる一瞬にただゆりが笑った

ナスガママ、アルガママにてユニゾンする偶然のしたたかな蓂

かのひとを恋うる夢から醒めしただくらがりのなか両の眼をひらく

燕麦のスープ一匙ぼくは呑み知らない星の地上へ降りる

天体をかすめて落ちる衛星の望郷にみな焼かれてしまえ

汗の染む放浪詩篇かのひとの跡へむかってうち棄てたりぬ

冬の木のかげ昏れるとき静かなるわたしのなかの機影を掴む

枕木を数えて歩む帰り道
充ちたりたれるわたしの列車

屠らるる敗馬のうちの光りたれまなこの奥の少年のぼく

通行止めのバーがたがい
を遠ざける花のかげなどない公園通り

たったいま愉樂を知らずうたたねる港の杭にとどまれる鳥

立ちどまる猫や光りの一滴を夜のうちなるやさしさにして

凍てる星ひろげる両手天体を抱きしめんとす子供らの夜

神を説くひとのかげあり遡るきみの知らない男の降臨

去ってしまったかれらの女らのことを記号に変えてばらまく夜

いつまでも青傘のなかでかくれんぼしてるふたりの猫が

ひとりのみ隠れ蓑のかげがある雨の降る港その端にいて

子供らの駈け去るかげが差していま色素の落ちていたりぬ

硯泣くような気がして墨をとめ、わずかなそれを指で弄くる

もう春がまるで近くにあるようでふと立ちあがる軽量係

それまでとおもいながら雪の跡手袋だけが手をふっている

妹のたわむれどきのつかのまに母が胡桃の殻をわるなり

雲果つる夜の頭上に閃いてきみの指までつづく天体

みずからの名すらも忘れ立ちどまる給水塔のうえの旅人

老木のごとき時間を過したる夕暮れまえのぼくのためらい

中也ごとマント掛けたる冬をいま鏡のむこうに見て風車

月光を遮りながら去るバスの無人のあとにわれゆく路

薪をわる手斧のひとつ殺しをばおもいながらに父を見つむる

ポスト・パンクするせつなさよやがてみな幾千の雪になればよい

墓地過ぐるひととき雪の反射にて子供の墓碑へ光りおりたり

ぼくたちのまだやはらかなうちがわにきみらしい棘をひとつ捧げて

眠る冬知らない土地をふかぶかと踏み歩みゆくような犬のまなざし

晩年についてぼくが考えたことたとえば山羊のやわらかさとか

トム・ヴァーレーンみたいにギター弾きたいっていう女の子いた

エラスムス不在のうちに現れて神を説かれる淋しい寒帯

門の黙するままに閉じられて箒のかけにすがる木枯らし

発つ霧へふいにマッチをかざしたるわれは猪^い圈^{こく}のひとも知れず

跋

ここに収めたのは、'04年から'19年までの歌より撰んだものである。短歌はそれまで詠んだことなど、国語の授業を除いてなかった。それが'04年の春に突如つくりはじめた。寺山修司「田園に死す」を読み、わたしは母殺しならぬ父殺しを書き撲った。それを森忠明へ送ったのだ。それから15年が経った。わたしはずっと短歌というジャンルに居心地のわるさを感じていた。これはメインじゃないと考えながらつくっていた。わたしはいまも文語文法に疎いし、確信があって歌を詠んでいるわけではないからだ。なにがよくて、なにがわるいのかもわからないままに詠んでいる。けれども、これからはメインの表現として詠むだろう。

なかたみつほ／來歴

'84年7月3日、西脇市生まれ、神戸市出身、在住。夜間高校卒業後、職業・住居を転々とする。'04年より出版局「a missing person's press」主宰。詩集「38wの紙片」、「世界の果ての駅舎」、短篇集「夏の兵士たち」ほか。

星蝕詠嘆集／ Eclipse Arioso

copyright © by Mitzho Nakata / 2004-2019

2019 年 11 月 20 日・初版発行

2021 年 2 月 12 日・改訂第 2 刷発行

著作・編輯・装丁・発行／中田満帆

題名・撰歌・監修／森 忠明

発行所／ a miassing peroson's press

〒 651-0092

兵庫県神戸市中央区生田町 1-1-13 新神戸マンション北館 303 号

078-200-6874 / mitzho84@gmail.com

ISBN978-4-9909502-5-5 C0092

Printed in Japan